

6.虫祭りについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6960

6. 虫祭りについて

岩崎元香

1. はじめに
2. 上山の虫祭り
3. 西二又の虫送り
4. 上大沢の虫祭り
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

夏の本調査の際、もっとも私の印象に残ったのは「虫祭り」のお話であった。虫祭りとは、田（稲）につく害虫（ウンカ）を追い払うために行われる農耕行事である。一般的には「虫送り」と呼ばれることが多く、わらで作った人形に村域内の害虫の霊を宿らせ、村外に送り出すという方式がよく見られる。また、鉦や太鼓、たいまつを用いるところも多い。鉦や太鼓で囃し立てれば、害虫が音に驚いて水に落ちたり、あるいはたいまつ火に入ったりして、退治することができると考えられていたためである。かつては広く全国的に行われていたが、現在では農薬の普及によって、廃れてしまったり芸能としてだけ残されたりするケースが多い。

虫送りは、一村内のみで行われる場合と、近村と村継ぎで行われる場合とがあり、上山、西二又、上大沢の三村の虫祭りは後者である。山の上の方に位置する上山から順に、西二又、上大沢と虫を送り、最後には海に流す。

しかしこの地域では、どの村もほぼ同じ頃に虫祭りを行わなくなった。今から40年ほど前のことである。なにぶん昔のことではっきりと覚えている方が少なく、確実なことは言えないのだが、1970年（昭和45年）前後のことらしい。とは言え、上山では「たいまつを持って田んぼの周りを回る」というスタイルの虫祭りはなくなったが、神事は行われている。また上大沢では、一度なくなった虫祭りがその後復活している。

この章ではまず、上山、西二又、上大沢の順に、虫祭りの現状や過去の様子などを見ていく。そこから、虫祭りの存亡に関する村それぞれの対応を、その地域性などと結びつけて探りたい。

2. 上山の虫送り

2.1 現在の虫祭り（神事）

上山では現在、虫祭りとして神事だけが行われている。この神事は昔からあったもので、神主さんも昔からいらしていたという。この神主さんは西二又の神主さんと同一だが、西二又では虫祭りに神主さんと呼ぶことはなかった。この点で両者は異なっている。

虫祭りが行われるのは、神主さんや村人の都合を考え、毎年6月20日前後の日曜になるという。神事の具体的な手順は以下の通りである。

午前8時半、人々は上山の神社に集まる。このとき、各家から米を一升ずつ持ってくることにしている。神事が終わったあと神主さんにお礼として渡す分である。人々は集まったら、まず神社の掃除や草むしりを行う。集まるのはだいたい各戸から一人。特に人数制限はしていないし強制もしていないが、例年そうなるのだそうだ。掃除が済み、10時頃になると神主さんがいらっしゃる。祝詞をあげ、あらかじめ全戸数分用意してあったゴエ（御幣）を祭壇にかざり、お祓いする。終わったらそれを各戸に一枚ずつ配る。神事に参加できなかった人のゴエは、各集落の班長が代わりにもらって帰る。それで神事は終わりである。その後神主さんは、Mさんの家で昼食をご馳走になって帰るのだそうだ。これは神主さんとMさんが親戚関係にあるからだろうと、Mさんの奥さん（60歳代）はおっしゃっていた。

持ち帰ったゴエは、新しいニガタケを切って、それには自分で自分の田んぼにさす。いつまでにしなければならぬという決まりはなく、当日中に済ませる人もいれば、何日か後にさしに行く人もいるという。ゴエを立てる田んぼも、それをさす位置も、特に決められてはいない。みな思い思いのやり方で行うらしい。

またこの地域には田んぼをやめた家も何軒かあるが、その家の人たちも虫祭りには参加している。ゴエも全戸分用意してあるので、一応もらって帰るのだそうだ。

2.2 かつての虫祭り

ここで言う「かつて」とは、約40年前までのことである。この頃までは、上山でもたいまつを持って歩くという形式の虫祭りも行っていた。この形式の虫祭りを、以下では便宜上「夜の祭り」と呼ぶことにする。

当時は、6つの集落がそれぞれに神事と夜の祭りを行っていたという。これは集落ごとに神社があったことと関係している。神主さんは6つの神社を順に回り、それぞれに神事を行っていたそうだ。ただし夜の祭りに関しては、上と池田は近接しているので、合同で行っていたという。

ちなみに6つの神社は昭和10（1935）年に合併している。夜の祭りがなくなったのが昭和45（1970）年頃で、神社が合併した後も35年ほど夜の祭りは続いていたことになる。では神社の合併とともに夜の祭りも合同で行われるようになったかということ、恐らくそうではない。「恐らく」と言うのは、その

頃の状況についてはお話を聞きした方もあやふやらしく、詳しくはわからなかったためである。しかし私はこの調査の中で「上山では集落ごとに虫祭りをしていた」というお話以外は聞いたことがないので、神社合併後も夜の祭りは別々に行われていたものと思われる。

以下、池田のMさんご夫婦（60歳代男性、60歳代女性）に聞かせていただいたお話をもとに、池田と上において合同で行われていた虫祭りの具体的な手順について記述する。神事は昔からほとんど変わっていないということなので、ここでは割愛する。夜の祭りは、おそらくどの集落でも同様に行われていたと思われるが、Mさんも他の集落の様子についてはあまり分からないということだったので、「おそらくそうだと思う」としか言えない。どうやら上山では、それぞれの集落があまり干渉しあうことなく虫祭りを行っていたらしい。

夜の祭りが行われるのは、夕食後である。村の人たちはたいまつを持って田に集まってくる。たいまつは各家庭で作っていた。竹を細く切って束ね、石油を少し含ませて作る。集まった人々は、一列に並び、火をつけたたいまつを持って、田の周りをぐるっと回る。「ウンカムシは出て行けー」と掛け声をかけながらである。太鼓もあるが、一緒について回ることはなく、ずっと広場に置いたまま叩いていたようだ。また、祭りに出てきた大人たちは酒を飲んでいたという。宴会のような様相を多分に含んでいたらしい。そのほか、「壮年団の者たちが田植えの杵に紙を貼って、キリコを作っていた記憶もある」「何も無いところだから、祭りが一つの娯楽だった」とも、Mさんはおっしゃっていた。祭りが終わると、たいまつのは残りは川へ流してしまう。それと一緒に虫も川に流すというわけである。

2.3 虫祭りの廃止

虫祭りがなくなった理由としては、①防火のため、②農薬が普及して虫祭りをを行う必要性が薄れたこと、③若者が減ったこと、などが挙げられる。どうやら、他の2村に先駆けて上山で真っ先に虫祭りがなくなっただけでなく、上山以外の2村では、虫祭りを廃止した理由に「他の村でもやらなくなったから」ということが聞かれたのである。上山ではこのような話は聞かなかったので、恐らく上山が一番最初に虫祭りを廃止したのだと思われる。またそれ以外に、戦争中や戦後には、虫祭りが行われなかった時期もあったのではないかとMさんの奥さんはおっしゃっていた。これは直接的な原因ではないにしろ、虫祭りの士気を奪う一つの要因であったかもしれない。

3. 西二又の虫祭り

3.1 かつての虫祭り

西二又では、約40年前に虫祭りを廃止して以来、それに関する行事はなにも行っていない。

もともと上山のような正式な神事もなく、たいまつを持って歩く「夜の祭り」しかなかった。その夜の祭りの様子について、西二又のOさんご夫婦（80歳代男性、70歳代女性）に話をうかがった。以下、かつての祭りの様子を、その手順に沿って見ていく。

西二又の虫祭りは、上山の虫祭りが終わってから行われる。上山から直接連絡がくるわけではなく、風のうわさのように伝え聞いて、「じゃあ次はうちの番だ」という具合に行われるらしい。祭りの日時を決めるのは区長で、天候や稲の生育状況などを考慮して決定し、村中の家を一軒一軒回ってそれを知らせたという。

虫祭りが始まるのは、夕方7時半～8時頃である。村人は全員参加が原則で、夕食を済ませると伊勢神社に集まってくる。それぞれ家庭から、麦わらの大きな束を担いで持ってきていた。それを一掴み引き出して、火を灯してたいまつとするのである。当時、麦を育てていない家は一軒もなかった。

区長が神主代わりになって、集まった全員でお宮参りをする。神主さんと呼ばないのは、神主さんが別所谷の人で、来てもらうには大変な時間がかかってしまうからだ。神社にはお神酒が奉納されていて、参加者はそれをいただき、それから虫祭りが始まる。

神社に保管されている太鼓を下ろし、まずは芹池の方へ上っていく。そこに田があるからだ。このときはまだ、たいまつに火をつけない。芹池の田についたら点火である。そして「ウンカムシ出て行けー」と言いながら、今度は山を下りていく。太鼓は列の真ん中に行く。2人が担ぎ、2人が叩く。叩くのはそれが好きな人で、だいたい決まっていたそうだ。特に練習などしていなかったが、聞いているうちに自然と覚えて、受け継がれていったのだという。

一団の向かうのは、男女滝小学校である。当時はまだ道路が整備されておらず、川沿いに細い道が通っているだけだった。人々はその道を一列になって歩いた。太鼓を持つ人たちは、横歩きで進んだという。村人の数は70～80人ほどもいて、列はかなり長くなった。暗闇の中たいまつが列を成す様子は、それはきれいな光景だったとOさん（奥さん）はおっしゃっていた。

たいまつが燃え尽きたら、持ってきた麦わらからまた一掴み引き出して、火をつければよい。行列して歩く途中、自分の田のそばを通るときには、麦わらのたいまつを土居（あぜ）に寝かせて置いて

いった。火は一晩で消えてしまうので、火事などの心配はなかったそうだ。

小学校に着くと、道幅の広い所で少し休憩する。明かりのために、みな麦わら集めて火をつけた。

休憩が終わると、今度はもと来た道を上大沢との境（一つ目のカーブミラー、およびポンプ小屋のあるあたり）まで歩いていく。そこまで来たら虫祭りは終わりだ。たいまつや余った麦はそこで全部燃やしてしまう。火の後始末のために壮年団の者が残るが、そうでなければあとは解散である。



写真1 西二又と上大沢の村境付近

3.2 虫祭りの廃止

西二又の虫祭りが廃止された最たる理由は、若者が減ってしまったことであるが、農業が普及して虫祭りをを行う必要性が感じられなくなってきたことも一つの理由だそう。この2点は上山と同様である。麦を作らなくなったことも関係あるだろうともOさんはおっしゃっていた。また先にも述べたように、他の村でも虫祭りをしなくなったから、という理由もあった。虫祭りの廃止は、村の総会で決められた。

4. 上大沢の虫祭り

4.1 上大沢の虫祭りの概要

上大沢では現在、三村の中で唯一、神事と夜の祭りと両方が行われている。ちなみに、上大沢で行われる祭りには“山の祭り”と“海の祭り”とがあり、虫祭りは“山の祭り”とされている。「田んぼに虫がつかないように」という意味を持つのはもちろんのこと、「豊作祈願」という側面もあるそう。この祭りは上大沢でも最も大きな祭りで、参加者は100人を越えるという。老若男女を問わず、部落の者は基本的に全員が参加する。さらに、親戚や他の部落の人々が加わったり、子どもたちが学校の友達を誘ったりもするのだそう。子どもたちもこの祭りを楽しみにしていて、人々の娯楽のひとつとなっているようである。

4.2 現在の虫祭り

1) 祭りの手順

現在虫祭りを取り仕切っているのは、青年団である。村から出て暮らしている者も多いが、中にはこの祭りのために帰ってくる者もいる。そういった者たちや子どもたちの都合を考慮して、祭りは現在7月の第4土曜日に行われる。雨天の場合は翌日の日曜に延期され、その日も雨なら次週の日曜まで延びることとなるが、それほど延期された例はこれまでないと言う。

以下では上大沢で現在行われている虫祭りの手順・様子を見ていく。それにあたり、上大沢の方々のお話と併せて、NHK金沢放送局から2005年3月15日に放送された『奥能登 風の絆～間垣の里の四季』のビデオテープをお借りし、その映像も参考にさせていただいた。

たいまつを持って田を回るというのがこの祭りのメインイベントであるが、その前に神社では神事が行われる。神主さんの都合に合わせて、当日の午前中もしくは前日に行く。これには手の空いているものが参加することになっている。「集まるのは年寄りばかりだ」と何人かの方がおっしゃっていた。だいたい10～15人ほど集まってくると言う。神主さんは祝詞をあげ、ゴエを奉納する。神主さんの仕事はそれで終わり、その後は帰ってしまうらしい。参加者はそのゴエをもらって帰るが、これは神主さんが配るわけではなく、参加者が適当に持っていくのだそう。神事に来られない者の分は、誰かが代わりに持って行って渡す。また、神事のあと夜の祭りの前までに、神社から太鼓を下ろす。

夜の祭りが始まるのは、夜の7時半から8時頃である。村人たちは夕飯を済ませ、上大沢の橋のたもと（バス停のあたり）に集まってくる。青年団がたいまつを用意して待っており、集まった全員に一つずつ渡される。出発前には、太鼓が打ち鳴らされる。太鼓を叩くのは子どもたちである。そして、太鼓が先導する形で、人々は村の前の道（主要地方道輪島・浦上線）を西二又に向かって歩き出す。並ぶ順番は特に決まっていない。青年団の団長が「オンカムシー出て行けー」と音頭をとり、他の人々も口々に掛け声をかけながら歩く。

西二又との境まで来ると、行列はそこでストップする。そこからは、人々がおのおの自分の田のあぜにゴエとたいまつを立てに行く。田をいくつも所有している人は多いが、だからといってそのすべてにゴエやたいまつを立てるわけではない。代表してどこか一つ、山の上の方にも田を持つ人はそちらにも一つ、という具合である。ゴエとたいまつは、どちらも立てる場所は決められておらず、稲に火が移さないように気をつけて立てる。たいまつのは火は一晩で消えてしまうが、ゴエは雨風でなくなったりぼろぼろになったりしない限りは、その後もずっと立てっぱなしである。いつまで立てておかなければならないという決まりはない。なくなってしまったから良くないというものでもないらしく、ゴエがなくならずに残った場合でも、稲刈りや田植えの際には外してしまう。

みなゴエを立てに行っている間も、太鼓はずっと鳴り続く。ゴエを立てて戻ってきた人々は、そこで御神酒をいただく。そして30分ほど休憩する。

休憩が終わると、一団はもと来た道を上大沢に向かって歩いて戻る。村の入り口まで来ると、そこたいまつのは火は消してしまう。火事防止のためである。火の消えたたいまつを持ったまま、人々は村の川沿いの道を通り、浜まで出て行く。



写真2 上大沢の太鼓

浜は暗いので、明かり用に木を組み上げて火をつけたものが2つ用意してある。やぐらのようなものである。浜に来ると最初に点火され、人々は持っていたたいまつをその中に入れて燃やしてしまう。みなが集まったら、青年団が午前のうちに作って用意していたわらの舟が、海に浮かべられる。沖へ出すときに底がひっかからないようにするためだそう。青年団は火のついたたいまつを持って海に入り、たいまつのは火を舟に移し、沖へと押し出す。この舟はその年の作物の豊凶を占う役割も負っており、舟が湾からまっすぐに出て行けば豊作、途中でつかえたり沈んだりすると、その年は作物の出来があまりよくないとみなされる。わらの舟は赤々と燃えながら、風の後押しされて沖へ出て行く。それを見送ったら、虫を追い出すイベントは終わりである。

しかし、祭りはこの後も続く。浜で宴会が始まるのである。料理や酒、ジュースなどが用意され、人々は食べたり、飲んだり、太鼓を叩いたり、好き好きに祭りを楽しむ。この宴会を楽しみにしている人も多いようだ。これ以降は自由解散となり、これをもって虫祭りは終了する。

2) 青年団の仕事

虫祭りの中心的役割を果たすのが青年団であることは、先にも述べた通りである。ここでは彼らの具体的な仕事について見てゆこう。

夜の祭りの前、その日の午前中から、青年団は祭りの準備を始める。青年団のメンバーは、当日の午前 8 時頃に上大沢の橋のたもとに集合し、そこで仕事の分担を行う。現在、メンバーは全部で 19 人いるが、ここに集まってくるのは例年 12~13 人ほどだと言う。

青年団の仕事は①たいまつ作り、②浜の明かり作り、③宴会のための買い出し、④浜の掃除、の 4 つである。それぞれの仕事が終わったら、手の空いた者からわらを集めに行き、舟を作る (⑤)。

以下、青年団の 5 つの仕事について詳しく説明する。

① たいまつ作り

夜の祭りの参加者には、一人一本のたいまつが渡される。また田んぼにもたいまつを立てるので、全体としてかなりの数が必要となる。

メンバーはまず、たいまつ用の竹を何本も山から切り出してくる。それを 70~80 センチほどの長さに切り、古着を小さく切って灯油をしみ込ませたものをその中にぎゅうぎゅうに詰めたら完成である。小さな子どもからお年寄りまでみんなが持つものなので、持っていて危険でないように気を配っているようだ。この一連の作業は結構大変らしく、また数もかなりのものなので、人手が多く必要とされる。

② 浜の明かり作り

高さ 2~3 メートルほどのものを、2 つ。これは、木のコワを組み上げて作られる。コワとは材木を加工した際に余った部分の木材のことで、輪島の材木屋からもらってくる。そのほか、古くなった木製の舟を解体して使うこともある。形状や作り方に決まりはないので、製作者は自由に作ってかまわない。

③ 宴会のための買い出し

祭りが終わった後の宴会のため、ビールやジュース、料理などを輪島市街まで買いに行く。宴会の料理は婦人会が作ることもあるらしい。2 人ほどで人手は足りる。

④ 浜の掃除

浜を掃除する。浜は虫祭りの最終ポイントであり、宴会を行う場所でもあるので、ごみなどを片付けて安全にしておかなければならない。

⑤ ワラの舟作り

自分たちの分担された仕事が終わると、浜でわらの舟作りである。手の空いた者は部落中の家を回ってワラを集めてくる。各家から 2 束ずつワラを出すことになっているが、強制ではない。わらを出せない家の分は、みんなで工面する。舟は例年 3 隻作られるが、ワラがたくさん集まれば 4 隻作ることもあるようだ。大きさは 1.5~1.6 メートルもある。骨組みは竹で作られ、それをワラ縄で結束したら、上からワラをかぶせる。最後に舟の真ん中に竹をさして、完成である。海に流すため、自然のものだ

けで作るよう気を遣っているそうだ。作り方は年上の者が年下の者に教え、受け継がれていく。

以上が青年団の準備の仕事である。これらの仕事がすべて終わるのは、午後3~4時頃になるという。このほか、祭りの進行においても青年団はその中心として働く。団長が掛け声の音頭をとったり、舟に火をつけ沖へ出したり、宴会の最後まで残って後片付けをしたり、という仕事を行っているのである。また、宴会の買い出しなどのための金銭的負担も、すべて青年団が負っている。毎月積み立てしている会費の中から、費用を捻出しているのだそうだ。

4.3. かつての虫祭り

ここでは、現在行われている虫祭りの昔と比べて変わったところを挙げてみよう。

まず一つは、たいまつである。昔は麦わらで作ったのだという。当時の西保では麦が広く作られていて、質もかなり良かったという話だが、あまり金にならなくなり、次第に誰も育てなくなった。必然的に麦わらでたいまつを作ることはできなくなり、竹で作るようになったのだそうだ。

また、虫祭りの期日も若者が外に働きに出るようになって変わったようだ。かつては西二又の虫祭りが終わった後、気候や稲の生育状態を見て決めていたが、現在は日時が固定されている。

そして、太鼓に関してもいくつか変化が見られる。現在太鼓を叩いているのは小中学校の子どもたちと青年団メンバーの一人であるが、4~5年前までは壮年の方がその役目を負っていた。その方が引退した際に、それを受け継いだメンバーは太鼓の叩き方を変えた。そして現在は、彼が子どもたちに太鼓を教えている。また、かつては人が太鼓を担いで回っていたが、今は車の荷台に乗せて移動するようになっている。

神事も昔とは変わっている。かつては神主さんが来なかったのだが、虫祭りが復活して以後は神主さんを呼ぶようになったのである。それまでは、みなが神社に集まり、区長がお参りをするだけだったらしい。

4.4 虫祭りの廃止と復活

はじめに少し触れたが、上大沢の虫祭りも一度はなくなった。その理由は上山や西二又と同様で、若者が減ったことや他の村が虫祭りをやめたことなどである。また、祭りを行うには買い出しのためのお金やその他の物資が必要となるが、それらを工面するのが困難になったことも一つの理由ではないかというお話もあった。

これが復活したのは、今から10数年前のことである。あるいは20年ほど前という人もいた。青年団が言い出し、村の人たちは「若い衆がそう言うなら」と、彼らに賛同した。そして再び、虫祭りが行われるようになったのである。しかし、その経緯やきっかけに関してここで詳しく書くことはできない。というのも、青年団の方やそれ以外の方にも聞いてみても、「その頃のことはあまりよく覚えていない」と皆さんおっしゃるのである。

一つの推測として、「みんなで何かする機会がほしかったんじゃないかな」「祭りをすればみんなと

も会えるし」と、Hさん（30歳代男性）はおっしゃっていた。虫祭りの日には、外に出て働いている青年団のメンバーも多く帰郷してくる。よってこの祭りは、ほとんどすべての村人が一堂に会し、飲んだり、しゃべったりできる機会となるのである。ここには観光や村おこしとしての要素は見えてこない。村人たちが団結し、絆を深める場として、虫祭りが行われているのみだ。ただ、上大沢はもとも間垣で有名だったので、『間垣の里』の一つの年中行事として虫祭りもテレビで取り上げられ、その結果、それを目的として上大沢を訪れる人も増えたということのようである。

5. 考察

これまで上山、西二又、上大沢の虫祭りについて見てきた。過去に行われていた虫祭りは、おそらくどの村ともそれほど様相の異なるものではなかっただろう。しかし3つの村の虫祭りは、それぞれ異なる方向に向かった。

上山では、大掛かりな祭り（夜の祭り）がなくなっても神事は残った。昔から、神事と夜の祭りがある程度独立して行われていたからなのだろう。神事はそれほど負担にならない、とMさんの奥さんはおっしゃっていた。だから今後も、少なくとも自分たちの生きている間はなくなるまいだろう、と。西二又と上大沢では、神事は虫祭りの中に完全に含まれていた。だから虫祭りが廃止されたとき、神事だけが残るということはなかったのである。

しかし上大沢では虫祭りが復活した。それは若者の力によるものである。上大沢は、他の集落と比べて若者が多く残っている。上大沢の若者、特に青年団に所属する各家の長男たちは、一度は村を離れても、いつか必ず戻ってきて家を継ぐという傾向が強い。西二又や上山の人々からは、「上大沢には海があるから若者が残っているのだ」という声がよく聞かれた。海もあり、耕地整理された田もあり、環境的に恵まれているということなのだろう。上大沢では、他の集落と異なり、農業をやめた人がほとんどいないことから、それはうかがえる。また私が思うに、上大沢は集落が密集しており、また村人同士が親戚であることが多い、ということも関係しているだろう。地域の人々の親密度がきわめて高いのである。だからこそ先のHさんの言葉のように、村のみんなで集まって楽しめる機会がほしくて、それが虫祭りを復活させる動機の一つになったのだと思われる。

また、上大沢の虫祭りは外部に影響を及ぼした。Hさんによると、上大沢の若者たちが虫祭りを復活させたことを知り、県内羽咋郡志賀町（旧富来町）の若者たちも虫送りを復活させたという話を聞いたことがあるそうだ。富来町の虫送りは、伝統行事として観光・町おこしに利用され、新聞でも取り上げられたという。上大沢の虫祭りにはそのような要素がなかったことと比べると、富来町の虫送りはまったく逆である。しかし一般的に「伝統行事の復活」というと、町おこしのために行われることの方が多いような気がする。上大沢は、むしろ例外的かもしれない。

6. おわりに

山の上からふもとまで順に虫を送り、海から流す。この一連の関係をはじめて知ったとき、私はそれに感心してしまった。昔の人はまったく良く考えたものである。私が話を聞いた方々の多くも、同じようにおっしゃっていた。実際にたいまつと太鼓とでどれだけ虫を追い払えたのかは分からないが、大昔はともかく、話をしてくださった方々にとっては、虫祭りは娯楽としての要素が強いものであったようだ。私はその様子を直接見ることは出来なかったが、特に上山や西二又の方々が、嬉しそうに、そして懐かしそうに、そのお話をしてくださったので、話を聞くだけでもわくわくした。それだけに、なくなってしまったのは勿体無いと率直に思う。私がこうして文字に残すことで、これを読む皆さんの心に少しでも長く虫祭りの思い出が残ってくれたら嬉しい。また、上大沢の虫祭りが今後も続いていくように願っている。

最後に、『奥能登 風の絆～間垣の里の四季』のビデオを貸していただくにあたりお世話になったNHKの方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。